

《バッハ自由自在》って何？

東京バロック・スコラーズ（略称 TBS）音楽監督・指揮者三澤洋史に、
第 10 回演奏会（2014/2/23）の聴きどころをインタビュー♪



TBS は、バッハの受難曲や口短調ミサ曲などの大曲だけでなく、テーマを設けたオリジナルな演奏会を開き、さまざまな角度からバッハ作品にアプローチしてきました。

今回の演奏会のテーマ《バッハ自由自在》にはどんな意味がありますか？



バッハが、既存の楽曲を自由自在にアレンジして新たな名曲を生み出したことは「パロディ」としてよく知られるところです。今回のプログラムでも、ご来場の皆さんはカンタータ 40 番とミサ曲へ長調でそれを実感することでしょう。さらに今回はバッハの曲を僕自らがアレンジした曲も紹介します。この編曲と演奏を行うことで、バッハの楽曲にさらに一歩踏み込み、懐の深さに挑戦してその普遍性を確かめようと思っているのです。



確かにバッハの曲は、ジャズを始めとして、あらゆるジャンルの音楽に編曲されています。不思議なのは、演奏するとまるで初めからそうした曲に作られたようで違和感がありません。この点こそ、バッハ作品が自由自在に姿を変えられる魅力なんですね。



そうなんです。だから僕は TBS を立ち上げた時から、器楽曲を声楽曲に、声楽曲を器楽曲に、ソロを合唱にと、自由自在にアレンジして、バッハ作品の新たな魅力を引き出す演奏会を行いたいと思っていました。今回、それに初めて取り組むわけです。



その最初の曲として『フーガの技法』のコントラプンクトゥス 19（未完のフーガ）を選んだのには何か意味があるのですか？



「フーガの技法」はバッハ最晩年の作品で、最後の 19 番は未完のまま終わっています。実はこのフーガには、途中から「B-A-C-H」を音名とするメロディーがテーマとして出てきます。バッハが晩年に、自分の名前を織り込んだ曲を作ろうとしたが、ついに果たせず未完成のまま終わってしまったという曲。一般的にはオルガンやチェンバロで演奏されますが、楽器は指定されていません。それなら是非人間の声で表現してみたいと思って、それを四声の合唱にアレンジしました。



なるほど、だから「Kyrie eleison. Christe eleison.」という歌詞が 270 年後の現代に充てられたのに、歌えば歌うほどなじんで「初めからこの歌詞がつけられていたのでは？」という気持ちになるのですね。いつも、美しいメロディーに心が震えてきます。



まさにそこがバッハの素晴らしさです。この曲に違う歌詞をつけたら、また違った表情をもつ楽曲に姿を変えていくでしょう。バッハの可能性は無限です。僕は TBS で、バッハの新たな魅力をどんどん引き出していきたいと思っています。



今回は、ブランデンブルク協奏曲も演奏されますね。大変有名な曲なのに、なまで演奏されることは滅多にないので、こちらも楽しみです。



ブランデンブルクは全部で 6 曲ありますが、編成そのものが小さいのと、使用する楽器が全て違うため、プロが演奏会で取り上げるのは商業的にとても難しいんです。今回のプログラム、第 1 番はホルン協奏曲です。TBS のアンサンブルは、若く優秀な、バッハを弾きたくてうずうずしている人たちが集まっていますから、きっと素晴らしい演奏になるでしょう。僕も楽しみにしているんですよ。